

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	宮本 佳範
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程修了	博士 (人間文化)	社会学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

観光に関する専門的知識を教授するとともに、幅広い教養および観光を題材に社会人として広く求められる力、いわゆるジェネリックスキルを育成する。

【目標】

観光実務士プログラムに沿って履修する学生、その他特に観光分野に興味を持つ学生には、観光に関する専門的な知識や諸問題に関する考え方を理解し、考察する能力を育成することを目標とする。それ以外の学生に対しては、授業のなかで観光に関する事例をきっかけにしつつも、幅広く周辺領域、関連知識に話を広げるなかで、一般常識・教養を身に着けることを目標とする。

【方針】

対話とアクティブラーニングを重視し、教育効果を高める。

【計画（方法）】

基礎科目や概論など基礎的な知識を学生に教授するタイプの講義においては、学生への発問など対話を多く取り入れることにより、学生の参加、学生自身が考える機会の創出につなげ、集中力と理解の増進を図る。

応用系の講義科目では、グループワークや学生による発表などの機会を積極的に取り入れた授業を展開する。

ゼミでは、企業との連携を図るとともに、これまで通り主に企画系コンテストへの参加を目標とすることで、学生のモチベーションを高めていく。

【担当科目】

（前期）

観光マネジメント、観光資源探求、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、総合演習Ⅰ、地域観光論

（後期）

レジャー産業論、観光学、現代観光論、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

地域観光論、現代観光論、レジャー産業論、観光資源探求などで、授業の一部にグループワークや発表を取り入れた。それにより、講義科目においても知識の伝達以外に、協調性や考える力、表現力などのジェネリックスキル育成につなげるように意図した。

2年生のゼミでは、例年通り JAF 主催の「あいち学生ドライブスタンプラリーコンテスト」および、観光者を送り出す視点を学ぶために「海外卒業旅行企画コンテスト」に向けた企画に取り組んだ。残念ながらコンテストの本戦に残ることはできなかったが、学生たちはそれなりに積極的に取り組むこ

とができた。

3年生のゼミでは、「あいち観光まちづくりアワード」に取り組んだ。残念ながら本選出場を果たすことはできなかった。また、3年、4年の有志でJR東海バスと連携して、尾張四観音を巡るバスツアーを企画し、実施した。

○作成した教科書・教材

観光学および観光マネジメントにおいて、重要事項をまとめた穴埋め形式のプリントを作成した。4年生のゼミでは、「卒論の書き方」を作成した。

○自己評価

コロナの影響も無なかったことから、計画通り対話を重視した講義やグループワークや発表といったアクティブラーニング型の授業を実施することができた。ゼミ活動では、各学年の取り組みを円滑に行うことができた。特に3・4年生の有志で行ったバスツアーは2コース計8本行い、約130名の参加者となり、満足いく結果を残すことができた。

以上のことから、当初の計画を十分に達成することができたと考える。

II 研究活動

○研究課題

観光者のリスク認識等に関する研究

○目標・計画

【目標】

引き続き科研費の研究課題を進めていく。現時点では計画より大幅に遅れているため、少しでも挽回していきたい。

【計画】

昨年実施計画であったが体調等の問題で実施することができなかった海外調査を、可能であれば実施したい。ただし、昨年からの体調不良はまだ癒えていないこともあり、実施できる見込みは立っていない。実施できない場合、研究の視点を多少変更することで、文献研究で可能な研究を実施する計画である。

○2016年4月から2024年3月の研究実績（特許等含む）

（著書）

（学術論文）

- ・宮本佳範「オーバーツーリズムの諸問題と責任に関する考察－観光者の認識と責任の明確化に向けたタクソノミーの試み－」『東邦学誌』第51巻第1号、pp. 1-13、2022年.
- ・宮本佳範「少数民族観光における観光者の問題行動に関する考察－山岳少数民族が暮らすサバでの調査から」『日本山岳文化学会論集』第17号、pp. 27-36、2020年.（査読有）
- ・宮本佳範「問題ある観光を行う観光者の意識－ウルル（エアーズロック）登山最終年の事例から－」『東邦学誌』第48巻第2号、pp. 17-32、2019年.
- ・宮本佳範「観光者管理と観光者倫理－ブータンの事例から－」『東邦学誌』第47巻第2号、pp. 1-13、2018年.
- ・宮本佳範「グローバル化するツアー登山の問題と観光者のリテラシー：ベトナムのファンシー

パン登山を事例に」『日本山岳文化学会論集』第15号、pp. 91-101、2017年。（査読有）

- ・宮本佳範「ツアー登山問題に関する論点の批判的考察：アクセシビリティとツアー登山者の倫理」『日本山岳文化学会論集』第14号、pp. 67-75、2016年。（査読有）
- ・宮本佳範「観光倫理研究の課題と展望」『観光学評論』第4巻第2号、pp. 135-148、2016年。（査読有）

（学会発表） なし

（特許） なし

（その他） なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

科学研究費補助金（科研費）基盤研究C 採択 研究代表者 課題番号（20K12415）期間：2020年4月～2024年3月、研究課題名：「観光者の問題行為を誘発する観光者の認知特性、思考プロセス等に関する研究」

○所属学会

観光学術学会 日本山岳文化学会

○自己評価

今年度は科研費の研究課題の最終年であることから、夏季休暇中にこれまで実施できていなかった海外調査を実施しようと考えていた。しかし、昨年罹患した腰椎椎間板ヘルニアの影響が残り、長時間飛行機に乗ることができる状態まで回復することができなかった。それにより結果として研究を十分にすすめることができなかった。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

教務委員会、FD・SD委員会、教養教育センター運営委員会において自らの職責を果たす。

【計画】

委員長に任じられた教務委員会およびFD・SD委員会では、ようやく全体の流れがわかってきたので、より意義のある委員会活動となるよう努める。教養教育センター運営委員会については、2025年度のカリキュラム改変などに向け、本学なりの教養教育の在り方を考えていく。

○学内委員等

教務委員会(委員長)、FD・SD委員会（委員長）、教養教育センター運営委員会（委員）、

○自己評価

委員長を務めた教務委員会およびFD・SD委員会では、昨年度以上に能動的に各種改善にむけて取り組むことができた。ただし、必ずしも学部と教務の考え方の方向性が一致しているとはいえず、委員会からの提案を形にすることはあまりできなかった。両者の狭間で精神的に辛い状況ではあったが、とりあえず職責を果たすことができたと考える。

教養教育センター運営委員会では、委員としての立場で自由に発言し、それなりに貢献することができたと考える。

全体としては、概ね職務をこなすことができたと考える。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

これまでの研究・教育で得た知見や経験を活用し、貢献できるよう努める。

【計画】

名古屋市役所をはじめとする公的機関等からの求めがあれば、可能な限り協力する。また、高大連携授業や出張講義など、大学以外大学以外の教育の場における教育機会があれば積極的に行っていきたい。

○学会活動等

日本観光研究学会（未入会）からの依頼で、機関誌「観光研究」投稿論文の査読を担当した。

○地域連携・社会貢献等

- ・社会貢献としては、名古屋市からの依頼で、「名古屋城魅力向上イベント等実施・運營業務委託」にかかる公募型プロポーザルの評価委員を務めた。
- ・地域連携としては、教育活動の項目でも少し触れたが、JR 東海バスと連携して尾張四観音ツアーを企画し、実施した。その一環で、円空仏製作体験をお願いした荒子観音の「木っ端の会」様やあま市の「七宝焼アートヴィレッジ」「笠寺観音商店街振興組合」「ブリューパブおおぞね」など地域の方々の協力をいただいた。
- ・高大連携授業を東邦高校で担当した。

○自己評価

社会貢献全体として、当初の目的を十分に達成することができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

特になし

VI 総括

授業および委員会活動等は当初の目標を概ね達成できたといえる。一方、未だ昨年罹患した腰椎椎間板ヘルニアの影響が残ったこともあり、研究に関しては、海外調査ができず、ほとんど成果をあげることができなかった。とはいえ、2 月くらいには東京へ出張できるくらいには回復したため、次年度は海外研究を再開できるものとする。地域連携や社会貢献等は十分に行うことができた。今後も引き続き力を入れていきたい。

以 上